立命館人間科学研究，22，97-106，2011.

研究ノート（Study Notes）

開発援助アクターとしてのスポーツNGO[1)]

――ジンバブエ野球会の事例から――

石　原　豊　一

（立命館大学大学院国際関係研究科）

A Sports NGO as an Actor in Development Assistance：The Example of the Zimbabwe Baseball Society

ISHIHARA Toyokazu

(Graduate School of International Relations, Ritsumeikan University)

Modern sports is diffused all over the world as a cultural hegemonic phenomenon; they were what people living in colonies who yearned for such cultural phenomenon diffused by what the colonial power willingly accepted. On the other hand, sports functioned as a device of colonial rule for the colonial power. The sports which spread under the expansion of capitalism have become an integral part of the entertainment business and have expanded globally to seek new markets and athletes as cheap labor. Global sporting events where athletes from all over the world get together, such as the Olympic Games, function as a friendship tool which binds people together across borders. To support sports diffusion to developing countries from this perspective, can be regarded to be just as important as material and financial development assistance. This paper focuses on the Zimbabwe Baseball Society as an actor offering such support. Its original goal was to construct a baseball field in the capital city and promote baseball in the country. Their efforts in supporting and developing players resulted in producing a professional athlete who plays in the independent professional baseball league in Japan. While the globalization of professional sports contributes to increasing low level feeder leagues trying to develop players across the world, the movement of "professional baseball players" from developing countries to developed countries with the assistance of support organizations is taking place as shown in the from-Zimbabwe-to Japan case. While sports which can function as a friendship tool, they are at risk of being trapped in the overwhelming trends of entertainment industrialization and deviating from their original purpose. Yet, the diffusion of sports can offer opportunities of upward social movements for those in developing countries.

Key Words：development assistance, Zimbabwe Baseball Society, NGO, global sports

キーワード：開発援助，ジンバブエ野球会，NGO，グローバルスポーツ

1）本稿は2010年５月30日に行われた第47回日本アフリカ学会（於奈良県文化会館）における研究発表「途上国援助アクターとしてのスポーツNGO～ジンバブエ野球会の事例から～」をまとめたものである。

本稿は，ある日本のスポーツNGOの活動の観察から，スポーツを通じた開発援助が，地球規模でのプロスポーツのネットワークの構築と人材獲得網の拡大という流れの中，アクターの意図するところとは別に，新たな「労働力貯水池」を実現させてしまうことを分析する。ここからはNGOの草の根の活動が，グローバル経済の中，結局は資本の論理に回収される一面も持ち合わせていることがうかがえる。

欧米で生まれた近代スポーツは，資本主義の拡大につれ，エンタテイメント・ビジネスと化し，サッカーなどの英国生まれのスポーツや野球に代表されるアメリカン・スポーツは，第二次世界大戦後，新たな市場と安価な労働力としてのアスリートを求めて全世界に広がった。

そのような資本と結びつく形でのスポーツのグローバルな拡大の一方，世界中のアスリートが集うオリンピックに代表されるように，スポーツは，国境を越えた人びとをつなぐ友好のツールとしても機能している。この流れの中，先進国からの開発援助としてのスポーツ普及は，経済的な援助同様に重要なものとみなされるようになってきている。このことは，JICAによる青年海外協力隊（JOCV）の活動にスポーツ指導が含まれていることからもうかがうことができる。

本稿においては，そのような開発援助のアクターとして，南部アフリカ・ジンバブエ共和国への野球普及活動を行っているジンバブエ野球会を採り上げる。本会は，日本の元野球指導者の自己実現の欲求から始まった活動を母体としたものであった。一個人の自己実現の夢が，JOCVのジンバブエでの活動と合わさって，首都ハラレでの野球場建設となって結実し，その後の普及活動を通じた選手の育成が，日本の独立プロ野球リーグへの選手送出という結果をもたらした。

現在，同様の先進国の団体による途上国へのスポーツ普及活動は各地で行われている。プロスポーツのグローバル化の結果としての選手育成を目的としたファームリーグの増加の流れの中，ジンバブエの例と同様に，これら開発援助を通してのスポーツの普及先から日本に「プロ野球選手」を送り込もうという動きも出始めている。このような動きは，友好のツールとしてのスポーツが，スポーツのエンタテイメント産業化の潮流にのまれてしまい，本来の目的を逸脱する危険性もはらんでいるが，同時にスポーツを通じた人的交流とともに途上国の人びとに社会上昇の機会も提供している。

1．問題の所在

欧米近代社会に起こったスポーツ[2)]は，その後，帝国主義の伸張に伴って地球規模に拡大した。このスポーツの世界規模の普及は，宗主国が植民地の人々に押し付けたというよりも，むしろ植民地の被支配者が，宗主国の文化へのあこがれからからスポーツを受容する「文化ヘゲモニー」としての広がりとされるが（Guttmann, 1996：池田・石井・石井・谷川訳，1997），その後のスポーツのグローバルな拡大は，資本との結びつきを強めたプロスポーツとの関連で語られるようになった。そしてこのプロスポーツの拡大に伴って，地球規模での金，人，物を巡るネットワークが構築されつつある。

1990年代以降，スポーツにおいてトッププロリーグによる地球規模の選手獲得網が拡大するに伴い，アスリートの移動フローもまたその規模を拡大し，そのことは世界各地でのスポーツ熱をますます高めている。例えば，すでにグローバルスポーツとしての地位を確立したサッカ

2）Guttmann（1996：池田・石井・石井・谷川　訳，1997）は，近代以前の身体運動を近代以後のそれと区別し，「伝統スポーツ」としている。

ーにおいては，欧州プロサッカーでのアフリカ人選手の活躍がアフリカ各地において青少年のサッカー熱を加速させた（岡田，2001）。

また，野球においては，メジャーリーグ・ベースボール（MLB）が選手獲得網を地球規模に拡大し（Klein, 2006），その結果，世界各地で新興プロリーグが設立されている。1990年代以降，台湾（1990），コロンビア（1993），中国（2002），パナマ（2001），ニカラグア（2004），イスラエル（2007）でプロ野球リーグが設立されたが[3)]，これらの多くは，北米や日本などの上位リーグに対する選手プールの役割を果たしている。このような選手プールは，北米，日本というすでにプロ野球が存在する地域においても独立プロ野球リーグというかたちで拡大している[4)]。先に挙げたプロリーグの設立された国には，「野球不毛の地」とでも言うべき中国，イスラエルも入っている[5)]。この現在成長，拡大しつつある各国プロ野球リーグの資本や人をめぐるこのネットワークを筆者は「ベースボール・レジーム」として提示した（石原，2010d）。

2006年春，「ベースボール・レジーム」拡大の一諸相として発生した独立プロ野球リーグのひとつである四国アイランドリーグ（現四国九州アイランドリーグ）の香川オリーブガイナーズに南部アフリカ・ジンバブエ生まれのシェパード・シバンダ（Shepherd Sibanda）選手が入団した。彼は，その後別の独立リーグであるベースボールチャレンジ・リーグの福井ミラクルエレファンツに移籍し，2008年シーズンまでプロ野球選手としてプレーした。

野球の普及度の低いアフリカにおいて，ジンバブエは，国際大会を開催し，それらの大会においてメダルを獲得している。しかし，現実には国内において野球はメジャースポーツではなく，サッカーやクリケットが依然として人気スポーツである。一般には野球というスポーツはほとんど知られていないと言ってもよい。

クラインは今後のMLBの選手獲得網はMLBによる野球普及活動を伴って広がっていくとした上で，その有望な普及先として南アフリカ共和国（南ア）を挙げている（Klein, 2006）。しかし，現在のところジンバブエはMLBの国際戦略の射程には入っていない。

この「野球不毛の地」から日本への野球選手の移動の道筋を作ったのは，民間のNGO活動である。ひとりの元野球指導者の個人的な発想から始まったジンバブエでの球場建設と野球普及活動の結果生まれたジンバブエ人初のプロ野球選手は，スポーツのグローバルな拡大という文脈の中でいかなる意味を持つのだろうか。そのことを分析するのに，本稿では開発援助としてのスポーツを新たなスポーツのグローバル化の型としてとらえ，その活動が，拡大する「ベースボール・レジーム」中，いかなる意味をもつのかをジンバブエ野球会の事例から検証する。

2．開発のツールとしてのスポーツ

現在，スポーツは単なる娯楽，ビジネスのツールとしてではなく，途上国への開発援助にも利用されるようになっている。2010年１月に起

3）コロンビア，パナマ，ニカラグアには1940年代後半から1960年代初めにプロリーグが存在したが，その後消滅した。また，2001年に再開されたパナマ，2007年に創設されたイスラエルのプロリーグは１シーズンで消滅している。石原（2010d）は，コロンビアのプロリーグ復活の年を1999年としているが，これは，現行リーグの運営主体である「チームレンテリア」によるリーグの発足年である。以前のリーグホームページは現行リーグの始まりを1999年としていたが，新たなホームページでは，1993年からのプロリーグの歴史が追加された。http://teamrenteria.info/teamrenteria/Joomla/（2010年８月25日アクセス）

4）独立プロ野球リーグについては，鈴木（2007），石原（2010c）参照。

5）中国プロ野球については石原（2010b），イスラエルプロ野球については石原（2008）参照。

こったハイチでの大地震において，日本の医療団体が，野球を通じての被災者の心的外傷ストレス障害軽減の活動を，復興支援活動の一環として行うことを発表した。

このような開発援助における経済開発から人間開発へのパラダイムシフトが生じたのは1990年代に入ってのこととされる。この流れの中で，「スポーツを通じた開発（International Development Sport, IDS）」が増加し，本稿の対象となるジンバブエに関連しては，フランスから「オールアフリカンゲーム」に約２億円の無償資金協力（1995）が実施されるような事例があがっている（岡田・山口，2009）。

岡田は，アフリカにおける開発を論じるのに，スポーツを通じた開発効果を期待し，これを「こころの栄養」として提示した。貧困を引起す原因の根絶を目指した「人間開発」の文脈に開発援助のツールとしてのスポーツを置く考え方は，1999年に開かれた国際オリンピック委員会（IOC）と国連開発計画（UNDP），ユネスコなどの国連機関による「平和文化のための教育とスポーツのための世界会議」で示されている。ここでは，人道援助義務の観点からスポーツを通した青少年育成と平和維持が語られ，スポーツと開発の繋がりが明確にされた。この結果，国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）とIOCによって，難民キャンプへのスポーツキット配布が実施されたり，UNDPによるスポーツを通じた異民族相互理解を目的とした「民族間スポーツプロジェクト」のような，内戦などによって傷ついた人びとのこころのケアを考えた施策が実行に移された（岡田，2001）。

アフリカへのスポーツ普及は先進国による啓蒙活動とも連動し，カナダの国家系組織・CCACによるジンバブエにおけるスポーツ普及活動は，この国に蔓延するエイズ問題への理解を深め，積極的に取り組む人材の育成を目論んだスポーツ大会の実施というかたちであらわれた（岡田，2002）。

また，戦乱などによって荒廃した途上国におけるコミュニティの再生にスポーツが利用される例が，先進国の援助を通してではなく途上国内のコミュニティの自助的な活動としても見られるようになり，長らく内戦に苛まれていたカンボジアにおいて，この国有数の観光地であるアンコール遺跡を擁した地方都市シェムリアプでの観光業者によるサッカーリーグの事例などが報告されている（岡田，2009）。

開発援助においては，物質的なものだけでなく精神的な面も重視すべきだという視点は，アフリカにおける援助活動の中で実践に移されている。ガーナへの野球普及活動に携わった友成は，日々の生活もままならない日常をおくるアフリカの人々へのスポーツ普及活動について，人が人らしく生きるという視点をとり上げ，物質的援助に加えての文化的援助として娯楽の提供の必要性を主張している（友成，2003）。本稿でとり上げるジンバブエへの野球普及もこの文脈にある。

３．ジンバブエ野球史

ジンバブエに野球が伝わった時期については明言できないが，現在残る野球大会のトロフィーの最も古い年代が1960年代半ばのものであることから，この時期がジンバブエ野球の黎明期であると推察できる。この時期，野球はラグビーやクリケットなどのスポーツを行う白人層のオフシーズンの余暇として行われていたに過ぎず，その普及度も低かった[6)]。

1980年に独立したジンバブエに，1991年野球・ソフトボール協会（Zimbabwe Baseball and Softball Association, ZBSA）が発足すると，

６）元JOCV隊員村井洋介からのＥメール（2010.4.24）。加えて村井は野球よりもむしろソフトボールの方が盛んではなかったかと推測している。

その会長となったマルコム・バーン（Malcolm Burne）は，アフリカ野球ソフトボール協会の会長にも選出され，以後ジンバブエは南アと並ぶアフリカ野球の中心的な地位を占めるようになった。翌1992年には，初のアフリカ大陸内での国際大会が開催され，ジンバブエ，南ア，ナイジェリア，ナミビアがこれに参加した[7)]。このアフリカ初の野球の国際大会は，後述するバルセロナ五輪とともに，日本がジンバブエ野球に関わる大きな契機となった。

草創期のジンバブエ野球における普及活動の担い手は国際野球連盟や米国の大学やキリスト教団体であった[8)]。また。ZBSA会長のバーンは，国際野球連盟を通してMLBロンサンゼルス・ドジャースのオーナーであったピーター・オマリー（Peter O'Malley）と懇意になり，道具の寄贈を受けた[6)]。しかし，これはMLBによる南アへの普及活動（Klein, 2006）のような安価な労働力としての選手獲得網拡大を目論んだものではなく，継続的なものにはならなかった。

日本とジンバブエとの野球を通した関わりは，1992年のバルセロナ五輪における日本代表チームのプレーを観たZBSA会長のバーンが日本野球連盟へ指導者派遣の要請を行ったことに始まる。しかし，当時日本野球連盟は，海外への指導者派遣のシステムを持っておらず，結局途上国への開発援助の実施アクターであったJICAがJOCVの一環として元社会人野球選手の村井洋介を派遣したのが，日本によるジンバブエへの野球普及活動の始まりである。これ以後，この国における野球普及活動は本格化する。

村井は白人によってしかプレーされていなかった野球を黒人層へ普及させるべく黒人のマンディショナ・ムタサ（Mandishona Mtasa，以下マンディ）をカウンターパートとしてコーチに就任させ，黒人地区の学校訪問など草の根レベルでの普及活動を開始した。この結果，1994年に南部の都市ブラワヨで初めて行われたシニアレベルの試合のメンバーも全員黒人で占められるまでになり，1999年に行われたオールアフリカゲームのナショナルチームのメンバーはそのほとんどが黒人で占められるようになった[9)]。

しかし，2000年以来の政情不安はこの国の野球普及活動に大きな影響を及ぼした。独立以来独裁を続けたロバート・ムガベ（Robert Mugabe）大統領は，体制への不満のはけ口を白人富裕層に向けることで政権維持を計り，白人農場主の土地を強制収用し，黒人層に分配した。その結果，白人層の持つ農業技術が新たな土地の持ち主である黒人層に継承されず，農業生産は減退し，国内経済は混乱状態に陥った。これ以降，ジンバブエの政情は不安定になり，野球の普及活動も停滞した。

その後，政情の落ち着きとともにZBSAの活動も再開された。2002年春にはナショナルチームが，南アで行われた南アフリカ共和国州選抜野球トーナメントに特別参加した[10)]。その後も，後述するジンバブエ野球会によるドリームカップなどの大会も継続的に実施された。

しかし，経済混乱に伴って発生した都市部における闇市場解体を狙ったムガベ政権による「ムラムバツビナ作戦」（大規模強制退去・住宅破壊）の結果，2005年春にはJOCVによる野球普及活動は休止に陥った。

それでも，後述するジンバブエ野球会の援助や元協力隊員の村井などの個人の活動により，

7）ジンバブエ野球会・伊藤益朗提供のZBSA資料。
8）ジンバブエ野球会・伊藤益朗へのインタビュー（2010.4.22）伊藤はまたジンバブエへの野球普及活動のアクターとしてオーストラリアの団体も挙げていた。
9）この前回大会である1995年大会におけるナショナルチームのメンバーには黒人はマンディしか在籍していなかった。（ジンバブエ野球会，2000）
10）これにはジンバブエ野球会も人，金の両面から支援を行った。（ジンバブエ野球会，2002）

ジンバブエでの野球活動は継続した。2008年になって政情不安からジンバブエにおける全てのJOCV活動が休止されるとジンバブエ野球会の経済的支援も実施不可能となり，日本からの支援も事実上なくなった。それでも同年には野球協会とソフトボール協会が分離されるなどの動きがあり，ZBSA会長に再び就任したマンディの下，政府からの資金援助の凍結などの逆風の中，ドリームカップの継続，海外からの援助の要請などの活動が引き続き行われている。

4．NGOを通じたスポーツ開発援助：ジンバブエ野球会の事例

以上のような公式の窓口を通じたジンバブエへの野球普及の活動に加え，民間の援助アクターのひとつとして活動しているのが日本のNGOであるジンバブエ野球会である。

この会の発起人である会長の伊藤益朗は，関西の学生野球の名門大学から社会人野球まで選手として現役を続け，その後，高校野球，社会人クラブチームの監督として指導にも携わった人物である。実家が自営業をしていたため，教員などになって学生野球の指導を継続するという道は歩まず，家業を継いで現在に至っている。

彼がジンバブエへの野球を通じた援助を行うに至った理由は，自己実現であったという。指導者を辞め，家業に専念することになった後，一種の虚脱感に襲われたのだが，そのときテレビの報道でJOCVによるジンバブエへの野球普及活動について知るに至って思いついたのが，当地における野球場の建設だった。これを実行すべく立ち上げられたのが「ジンバブエFOD委員会」[11] であった。1994年に発足したこの任意団体は発起人の伊藤を中心にジンバブエでの野球場建設を目指すべく募金活動を行った。伊藤自身が「堅苦しい」制度的なものを好まないこともあって厳格な会員制度などは存在せず，そのメンバーは委員会の趣旨に賛同した募金者623人で構成された[12]。その多くは，伊藤の大学，社会人野球時代の同僚や指導者時代の教え子，その保護者であった。新聞などでその活動が取り上げられたため，野球場建設に十分な1000万円を超える寄付が集まり，1998年首都ハラレにジンバブエ初の野球専用球場は完成した。球場は「ハラレ・ドリーム・パーク」と名付けられた。

FOD委員会はジンバブエでの野球場建設を目的として募金活動を行っていたため，その当初の目的を遂げた時点で形式上は解散することになったが，この野球場建設事業を無駄にしないための継続的支援を目的として発足したのがジンバブエ野球会である。

ジンバブエ野球会は年間3000円の会費を募り，「アフリカの野球振興と野球交流をゆったりと支援する」ことをコンセプトに活動している。具体的には，会報を定期的に発行し[13]，加えて，広く野球道具の寄付を募ってZBSAに送付する他，ジンバブエでの野球大会の開催や，日本からジンバブエへの指導者の派遣，ジンバブエから日本への選手招聘などの人的交流を行っている。

ジンバブエから日本への選手招聘は，過去３度行われた。初めて行われた1994年は他団体により少年野球チームと高校女子ソフトボールチームが招待された。2003年の２度目の招聘は，ジンバブエ野球会によって実施され，このときは，３名の選手が伊藤の母校である大学の野球

11）FODは「フィールド・オブ・ドリームズ」の略である。無論この名は，同名のアメリカ映画に由来している。この映画の主人公は，他界した元野球選手の父からの「天の声」に従ってトウモロコシ畑を切り開いて野球場を造った。

12）同じ理由で伊藤は，ジンバブエ野球会のNPO法人化についてもその手続きが煩雑であると，その方針がないことを明言した。(伊藤へのインタビュー，2010.4.22)

13）会報『ジンバブエの風』は，1998年６月に創刊された。基本的に年２回の発行であるが，活動の状況により何度か発行は中断されている。

部のシーズン前の練習に約１ヶ月間参加した。これをきっかけにこの大学の創設者生誕150年記念事業の一環として，ジンバブエナショナルチームの招聘が2004年に実施された。

この３度のジンバブエから日本への選手招聘全てに参加したマンディは，2001年にはジンバブエ野球協会初の黒人会長に就任するなど，現在に至るまでジンバブエ野球界の中心人物である[14)]。また，2004年来日のナショナルチームの主力打者であったシェパード・シバンダはのち，日本の独立プロ野球リーグに身を投ずることになった。

以上のような，1994年から継続して実施された日本のNGOによるジンバブエへの野球を通した援助活動は，先述した2000年以降のジンバブエ国内の混乱により次第に実施が困難となり，その後ジンバブエ野球会の援助活動の対象は，アフリカの中でも野球の普及度の高い南アや中国へ拡大された。しかしこれも2008年頃から適当な支援対象が見つからなくなり，2009年には活動は事実上休止となった。

ジンバブエ野球会の活動が本格的に再開されたのは2010年になってからのことである。活動休止中も引き続き各所から野球道具の寄付があったのだが，2009年のジンバブエにおける連立政権樹立に伴い，政情が落ち着きを取り戻すと，活動再開を模索すべくこれらの野球道具の現地への送付が行われた。これが無事届き，援助環境が整ったことを確認した上で，送金も再開された[15)]。

５．ジンバブエ人初のプロ野球選手，シェパード・シバンダ

ジンバブエ野球会の活動の中で，ハラレでの野球場建設と並ぶ大きな活動成果は，日本の独立リーグにプロ選手を送り込んだことである。

ジンバブエ人初のプロ野球選手シバンダは，2004年に来日したナショナルチームの主軸打者であった。この遠征をきっかけに2005年10月に再度来日し，この年発足したプロ野球独立リーグ，四国アイランドリーグのトライアウトに合格した。その後2006年から３年間プロ野球選手としてプレーした。

地域活性化とともに既存のプロ野球リーグである日本野球機構（NPB）への選手送出を目的とした独立リーグにあって，満足な成績を残せなかったシバンダは，２シーズンで最初の所属球団，香川オリーブガイナーズを解雇された。その後ジンバブエ野球会の支援により別の独立リーグであるベースボールチャレンジ・リーグのトライアウトを受験し，卓越した身体能力を買われて契約を勝ち取ったが，日本での３年目のシーズンの途中の2008年の８月末に突如解雇された。解雇後，ジンバブエ野球会の支援を受けながら翌年発足することになる日本で３番目の独立リーグである関西独立リーグのトライアウトを受験するも合格を果たせず，結局帰国することになった。

ジンバブエ野球会にとって，その活動の結果，出現したプロ野球選手は，一見，活動の大きな成果である。プロリーグが存在するスポーツにおいては，それがあることによって，途上国の競技者にとって，競技そのものが有効な富の獲得のツールとなる可能性を秘めている。また，途上国への開発援助としての野球普及活動の結果，競技レベル，選手報酬とも低い独立リーグとはいえプロ野球に人材を送出したことは，ジンバブエ野球会にとってもその活動の成果を大いにアピールすることになり，寄付金の募集の観点からも，今後の活動の継続，発展のためにも有効な成果であると言える。しかし，伊藤はジンバブエからのプロ選手送出は，野球を通し

14）但し，彼は国内の混乱の中，一旦その職を解かれている。
15）伊藤へのインタビュー及びジンバブエ野球会（2010）。

た人的交流の一環でしかないとする。実際，シパンダが独立リーグに入団したことにより寄付金が増加したわけではなかった[8)]。

ジンバブエ野球会がシパンダの独立プロ野球リーグ入団を目論んだ理由は以下の通りである。2000年以来の政情不安から年々日本からジンバブエへ人を派遣することも難しくなってきた。2005年にJOCVによる野球普及活動が休止された後は，受け取り側の事情から，経済的援助も行いにくくなっていた。そこで，ジンバブエから選手を受け入れようという発想が生まれたが，これにしても留学という形では，金銭面においてその実現は難しい。そこで，選手の自活が可能な報酬が支払われる独立リーグへの選手派遣というアイデアが持ち上がった[8)]。

つまりは，ジンバブエ初のプロ野球選手誕生は，ジンバブエ野球会の目的ではなく，当時の内外の政治的経済的情勢の結果実施されたスポーツを通した人的交流の手段のひとつであったと言える。実際シバンダ自身も，独立プロ野球リーグがその活動目的の柱のひとつとしているNPBやMLBなどの上位リーグでのプレーについて，それを来日の主目的として挙げることはなかった。彼は，自分の最終的な目標は，日本で学んだ技術やマネージメントを母国の野球発展に生かすことだとしていた[16)]。帰国後，南部の都市ブラワヨ近郊の妻の実家の農場で働くことになったシバンダは，ジンバブエでの野球の普及に尽力したい旨を表明していた（ジンバブエ野球会，2010）。

6．資本の論理に回収されるスポーツNGOの活動

ここまでのストーリーは，一見すると，ある一市井人が個人の自己実現を叶えるため思い立った途上国へのNGOによる開発援助活動の結果，「野球不毛の地」であったアフリカでの野球場建設とその後の野球普及活動により日本球界へプロ野球選手を送り込むという大きな成果をもたらしたというものである。

しかし，この開発援助によるジンバブエ人初のプロ野球選手誕生の要因を分析すると，アクターの意図に反して，この事例が，グローバリゼーションの進展によるプロスポーツにおける人材獲得網の拡大という資本による安価な労働力への需要への応答という一面を孕んでいることが窺える。

先述のように，グローバル化の進展の中，スポーツにおいてもトッププロリーグによる地球規模での各国リーグの序列化とさらなる選手獲得網の拡大にともなう普及活動が進展している。野球においては，北米トッププロリーグMLBによる各国リーグの序列化と事実上のファーム化，「野球不毛の地」への普及活動，そして選手の育成と上位リーグへの送出を目的とした新興リーグの創設という「ベースボール・レジーム」の形成と拡大となって現れているのであるが（石原，2010d），ジンバブエ野球会の活動のひとつの成果としてのプロ野球選手輩出もこのレジーム拡大と無関係ではない。

日本における独立プロ野球リーグは，直接的にはグローバルな競争にさらされた日本企業がそれまで保有していた野球部の休止を余儀なくされた結果，競技の継続ができなくなった選手の受け皿として誕生したものである。しかし，「ベースボール・レジーム」の視点から見れば，それは，1990年代世界各地にできた上位リーグへの人材の輩出を目的とした競技レベルの低いプロリーグが，それまでプロリーグの存在した北米や日本に拡大したものと言え，これらの地域においては，独立プロ野球リーグの出現はプロの底辺の拡大を意味している。つまり，競技レベルとともに，選手報酬も落としたプロ野球

16）シバンダへのインタビュー（2008.8.31）

リーグの出現は，それ以前にはプロとして競技できなかったレベルの選手にプロとしての競技の場を与えることになる。その場で低報酬に甘んじることになる選手の多くは，上位リーグに上昇する一部の選手の「かませ犬」の役割を背負わされることになるのだが，途上国の選手にとっては，その「かませ犬」としての報酬さえ，母国では手にできない高額なものになる。それゆえ，彼らはスポーツ労働移民として国際移動を行う（石原，2010a）。

この文脈からは，アクターの意図するところとは関係なく，スポーツの普及を通した開発援助が「ベースボール・レジーム」の選手獲得網に組み込まれる現状がうかがえる。2009年秋にはNGO団体による野球普及活動の延長としてネパール人選手が関西独立リーグのトライアウトを受験するなど，実際ジンバブエ野球会同様の例も出てきている。おそらく今後も同様の事例は起こってくるものと考えられる。

7．まとめ

以上本稿では，スポーツを通じた先進国から途上国への開発援助がスポーツのグローバル化の中でどう位置付けられるのかを日本のNGOの例について考察した。本稿で採り上げたジンバブエ野球会の事例からは，NGOが行った開発援助としてのスポーツ普及が，結果として途上国からのプロアスリート送出という現象を生んだことが発見されたが，これについては，さらなる分析が必要であろう。

ジンバブエ野球の中心人物である現ZBSA会長のマンディは途上国におけるスポーツ普及の必要性について以下の点を指摘している。1.スポーツに夢中になることにより，つかの間だが貧困を忘れることができる。2．富裕な人々と対等にプレーすることにより誇りを持てる。3．現時点では，経済的にはさほどの意味を持たないが，将来的にはビジネスとしての成長を期待できる[8)]。

1については，すでに述べた「こころの栄養」（岡田，2001）や文化的援助（友成，2003）などと同じ文脈でとらえることができる。2については，米国の経済的後背地であったドミニカ共和国への野球普及の要因として，スポーツが弱国の人々が強国人々に対する「抵抗の場」を提供していることを挙げたこと（Klein, 1991）と同様の論理であると解釈できる。3については，すでに先進国においてスポーツが一大産業となっている流れが低開発国にも押し寄せていると解釈できるし，また，スポーツが低開発国の人々にとって富へのツールとなる可能性を秘めていることを示している。これらからは，スポーツを通じた開発援助の有効性を垣間見ることができる。

そして，近代の幕開け以来のスポーツの普及という観点からは，開発援助を通じたスポーツの普及は，帝国主義の時代に植民地の人々に宗主国の娯楽が受容された「文化ヘゲモニー」（グットマン，1997）的普及，ビジネスとしてのプロスポーツ発展に伴う地球規模でのスポーツにおける「労働力貯水池」の拡大（Bale, 2004; Klein, 2006）の一環としてのスポーツ普及に続く新たなスポーツ普及のかたちであると言える。この文脈からは，開発援助としてのスポーツの普及活動が，結果として富を目指して越境するスポーツ労働移民の新たなフロー回路を出現させていることが読み取れる。

本稿で示したジンバブエへの野球普及活動からは，スポーツを通じた開発援助が，地球規模でのプロスポーツのネットワークの構築と人材獲得網の拡大という流れの中，アクターの意図するところとは別に，現実には新たな「労働力貯水池」を出現させるという現実がうかがえた。このことは，スポーツNGOの活動が資本の論理に回収される一面もまた持ち合わせていると

いうグローバル経済のひとつの不可避な帰結を意味している。

謝　辞

本稿執筆に当たっては，元海外協力隊員・村井洋介氏とジンバブエ野球会長・伊藤益朗氏から多くの情報を提供していただいた。シバンダ選手へのインタビューに協力いただいたベースボールチャレンジ・リーグ，福井ミラクルエレファンツ球団とあわせてここに謝辞を示す。

引用文献

Allen, Gattmann（1996）*Games and Empires : Modern Sports and Cultural Imperiarism*. New York：Columbia University Press. 池田恵子・石井昌幸・石井芳枝・谷川稔（訳）（1997）「スポーツと帝国～近代スポーツと文化帝国主義」．昭和堂.

Bale, J.（2004）Three geographies of african footballer migration: Patterns, problems and postcoloniality. In Gary Armstrong & Richard Giulianotti（Eds.）*Football in Africa: Conflict Conciliation and Community*, 229-246.

石原豊一（2008）ベースボール拡大の諸相―イスラエルプロ野球にみるスポーツ産業のグローバル化―．スポーツ産業学研究，*18*（*2*），21-29.

石原豊一（2010a）プロスポーツのグローバル化における「スポーツ移民」の変容―「野球不毛の地」イスラエルに集う「プロ野球選手」の観察から．スポーツ社会学研究，*18*（*1*），59-70.

石原豊一（2010b）中国プロ野球の可能性．スポーツ産業学研究，*20*（*1*），81-90.

石原豊一（2010c）独立プロ野球リーグの現状．体育の科学，*60*，318-322.

石原豊一（2010d）プロスポーツにおけるグローバルな相互連関関係＝「ベースボール・レジーム」の構築と拡大についての一考察―2008年世界プロ野球におけるスポーツ労働移民の分析から―．ベースボーロジー，*11*，46-79.

Klein, A.M.（1991）Sport and culture as contested terrain: Americanization in the caribbean. *Sociology of Sport Journal, 8*, 79-86.

Klein, A.M.（2006）*Growing the Game: The Globalization of Major League Baseball*, New Haven: Yale University Press.

岡田千あき（2001）アフリカスポーツと開発．月刊アフリカ，*41*（*5*），18-20.

岡田千あき（2002）身体活動を通じた教育開発―ジンバブエ共和国AIDS/HIV教育の検証．大阪外国語大学論集，*26*，167-183.

岡田千あき（2009）スポーツを通じたコミュニティエンパワメント．大阪大学大学院人間科学研究科紀要，*35*，1-22.

岡田千あき・山口泰雄（2009）スポーツを通じた開発―国際協力におけるスポーツの定位と諸機関の取組み―．神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要，*3*（*1*），39-47.

鈴木裕輔（2007）独立リーグの機構と実際．ベースボーロジー，*8*，196-203.

友成晋也（2003）「アフリカと白球」文芸社.

ジンバブエ野球会（2000）ジンバブエの風，*4*.

ジンバブエ野球会（2002）ジンバブエの風，*9*.

ジンバブエ野球会（2010）ジンバブエの風，*24*.

（2010. 8. 27 受稿）（2010. 11. 15 受理）